

A5 ドビュッシー：《子供の領分》より「グラドゥス・アド・パルナッサム博士」

《子供の領分》は1908年7月に完成され、愛娘シュシュに捧げられています。第1曲「グラドゥス・アド・パルナッサム博士」は、ピアノを習い始めた子供がいよいよ練習している様子を描写したと言われることが多いですが、この時点でシュシュは2歳半。クレメンティの練習曲集《グラドゥス・アド・パルナッサム（パルナソス山への階段）》を弾けるとは思えません。タイトルのパルナソス山とは古代ギリシャ時代の聖地で、転じて「ピアノ技術の高みに登る」という意味を持っています。

ドビュッシーは《12の練習曲》の第1曲に「チェルニー氏に倣って」という副題をつけましたが、当初の構想では、タイトルが「グラドゥス・アド・パルナッサムのために」となっていました。彼にとってこの手の練習曲の総称だったことがわかります。

しかし、たとえば冒頭部分を単なる指の練習ととらえるのは間違いです。ドビュッシーは最初にピアノを手ほどきした先生（一説にはショパンの弟子）の影響でバッハを深く愛していました。バスが伸びている上に展開される一連の分散和音は、バッハ《平均律クラヴィア曲集》第1巻第1番の前奏曲を思わせます（冒頭など、経過音のDを入れればそのまま「グラドゥス」の音型になります）。

バッハの平均律1巻1番の前奏曲の音型

Modérément animé

自然にハーモニーが
きこえてくるように

p égal at sans sécheresse

少し遅れのあるメロディとして意識する

また、あるパッセージから特定の音が伸びて別の旋律を形作るあたりもバッハの書法に似ています。ドビュッシーはバッハの音楽について、「数条の線が平行して動き、偶然に出会ったり、しめし合わせで出会ったりするとき、感動を呼び起こす」（『音楽のために』）と書いています。

「グラドゥス」にもそうした手法が活かされています。たとえば、③～④では8分音符に点のついた線が、⑤～⑥では4分音符になります。点で響かせるものと線で響かせるものの弾きわけが必要です。

13

手首を使ってやわらかくひびかせる

レガート奏法でのびる音を出す

16分音符はうるさくならないように

支えるようにたっぷり歌う

二重唱

13はクラヴサンの2段鍵盤のイメージで、左手を右手より高くとりまします。

14

チェンバロの二段鍵盤をイメージして
左右の手の高さを覚える

軽く押しつけないで

右手の上からはずませる

14では8分音符にテヌートがついているので、手首を落として少し深めのタッチで弾きます。その線が15では音を結ぶ4分音符になり、「espressivo」と記された16~18では訴えかけるようなメロディに発展します。その間、16分音符は音の粒を際立たせるのではなく、全体を溶かして美しいハーモニーをつくり、バスはそれを支えます。

16

手首を使ってやわらかくひびかせる

ここからは4分音符

手の立体交差。左を右より高くさせる

バスを歌う

expressif

この方向で手首をかたむけるとおねだりするような音が出る

17

18

19

手首や指の間隙を使って訴えかけるように

バスとハーモニーの変化がききとれるように

中間部ではバッハによくみられるように、16分音符のモチーフの拡大形が使われていますね。17、18では、左手の内声が右手の分散和音のひとつの音と結びついて新たな旋律をつくっています。

単純な曲と思われがちですが、実は「線を弾きわたる」技術が必要とすることがおわかりでしょう。「グランド」を適切に演奏するには、練習曲ではなくバッハを弾きこなす指が必要です。